

---

parallel magic

塩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

parallel magic

### 【コード】

N4564Z

### 【作者名】

塩

### 【あらすじ】

浮抹のデビュー作 あらすじはいずれかきます

## Scene 1 .

頭が痛い。

目の前にはいつもと同じ青い空。

だが、周りの景色は一変していた。

「…………え？」

うまく状況が呑み込めない。

まず、元いた場所を思い出そうとする。

でも、記憶はぼやけていて、はっきりしない。

次に名前。こちらもしっかり出せない。

年齢、住所、家族…………自分に関わるすべての情報が欠落している。

これは「記憶喪失」というやつだろうか。

そして、周りの景色。

中世ヨーロッパ風の建物が遠くにちらほらと見える。見覚えがない。

要するに、私はどこか知らない場所に飛ばされ、記憶も失ったということだ。

…………そうか、私は今とてつもなく大変な状況に置かれてるのか。状況は呑み込めた。が、この不可思議な状況に変化はない。

いろいろ考えた挙句、まず人を探すことにした。

とりあえずどこかに泊めてもらわないと元いたところに帰る前に死んじゃう。

人はおもうよりたくさんいた。人里離れたところじゃなくてよかった。

だがしかし何かおかしい。

みんな私から距離を置き、何か陰でヒソヒソ話している。

『魔女だ…………魔女がとうとう…………』

『近づくな！世界に破滅をもたらす魔女だぞ！殺されるっ！』

「ちよっと！どういっつもりよ！？」

私が怒鳴りつけると、『魔女が怒ったぞー！』と人々は逃げて行った。

どうもこの村には何か魔女に関する噂とか伝説があるのらしい。だがそれとこれとは別！見ず知らずの人間に『魔女』はひどい！何だか、前途多難のような気がしてきた。

そして、その予感は当たった。

村中歩いても誰も話を聞いてくれないのだ。

店に入ると追い出され、道を歩けば石をぶつけられる。

飛んでくる石を避けつつとうとう村はずれの森まで来た。ここから先に人は住んでいなさそうだ。

「洞窟とか廃屋とかあればいいんだけど……」

そう思って、私は森に入った。

私は、溜め息をついた。

どれだけ歩いても景色に変化がない。どこまで行っても木しかない。

だんだん暗くなってきた。おまけに鶉のような鳴き声までする。

「本物の魔女でも出てきそうね」

その時、雷が鳴った。

割と近くに落ちたらしく、大きな音に驚いた私は慌てて音と反対方向に走った。

すると突然、森が開けたのだ。

そこには古ぼけた大きな屋敷。あちこちひびが入り、ツタが絡んでいる。

屋敷から人が出てきた。少年のようだ。私は慌てて近くの木の陰に隠れる。

少年は私の隠れている木の近くへ来て、言った。

「いらっしやい。待っていたよ、魔女さん」

私は驚いた。

T  
O  
B  
e  
C  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
  
?

## Scene 2 .

「とりあえず出てきなよ。この状態で話するのもなんだし」

少年にそう言われ、私は木の陰から出た。

少年は思ったより背が高かった。片メガネがきらりと光る。

「待っていたってどういう事？」

私が聞くと、少年は笑って答えた。

「僕は君が来ることを予感してたからね」

「ふざけてるんですか。それとも頭がおいしいんですか」

「まあ説明は後回し。どうせ行くあてないんでしょう。うちにおいてよ」

寒さと孤独と空腹には勝てないであろう。

わたしは少し間を置いて首を小さく縦に振った。

「良かった。いろいろ聞きたいこともあるんだ。平行世界へのトリップを体験した君に」

「えっ、ちよっと！何のこ……」

「ほら、ごちゃごちゃ言っていないでついてきて！」

屋敷の方へ歩いていく少年を私は慌てて追いかけた。

屋敷に入ると、まず目に入ったのは美しい内装。……を台無しにするほどの大量のゴミ。

口を開けてゴミの山を見ると

「いやー。片づけが面倒すぎてどんどんたまっちゃってねえ」

という解説になってない解説が入った。

「家政婦でも雇うべきかなあ」

そう言って、何かに気づいた彼は私を見た。

そして要件を思い出した私は彼をまくし立てた。

「あなたのお家事情なんざどうだっていいのよ！平行世界？トリップ？それと私になんの関係があるってのよ！？」

「まあまあ落ち着いて。とりあえず座ってよ。話はそれから」

少年はそう言っただけ椅子を引いた。私はおとなしく座る。

「コーヒーしかないけどいい？」

別にいいけど、とそっけなく答えて落ち着いたふりをする。

でも実際は全く落ち着けてない。トリップって何？平行世界？理解できない。

わかるのは私は、私の知らない所で起きた大きな何かに、影響されたということだ。

「お待たせ。淹れたただから火傷しないようにね」

少年がコーヒーを持ってきた。

「さあ、いろいろ説明してもらいましょうか」

私がそう言うと、少年はにやりと笑った。

「そうはいかないよ。こんなチャンス二度とないからね」  
悪戯を思いついた近所のガキと同じ顔をした。

「住み込みでうちの片づけと家事、やってくれない？」  
予想通りすぎる。

「じゃあ……前向きに検討します」

「給料は払うよ？それに住み込みだからそれなりの暮らしだってできるし」

少年は服についたホコリを払いながら言う。

「働いてくれれば生活費はこちらで持つから、少しは余裕もできる。君の身に何が起きたかもわかる範囲で話す」

「なかなかの条件ね」

「断ってもいいけど、その時は野宿＋トリップの事もわからない。どうする？」

ああ。人の弱みに付け込むわけね。見上げた根性だ。

「いいよ。ここで働いてあげる。その代わりちゃんと条件は守りなさいよ！」

「そう来なくっちゃ」

こうして私は住む所と働き口をゲットしたわけである。  
でもなぜだろう。彼に全く感謝したくないのは。

T  
O  
B  
E  
C  
O  
N  
T  
I  
N  
U  
E  
D  
?



### Scene 3 .

月のない夜。外はもうすでに闇だった。

「で、私がおかれてるこの状況を早く説明してもらえますか？」  
「コーヒーを飲みつつ私は少年に言う。思ったより美味しかった。

「そうだね。約束だし、説明しようか」  
そして少年は話し始めた。

「まずは平行世界について説明するね。

ひとつの世界から分岐して、その世界と平行し進行する世界の事を平行世界パラレルワールドっていうんだ。

今俺らが生きている世界から見ると君の本来生きているべき世界がそれにあたる

ここで問題なのは、本来平行世界パラレルワールド同士が交わることはないんだ  
なのに君はこの世界に来た。

何らかの理由でつながるべきでない世界同士がつながっちゃったんだよね。

それが原因で君がこの世界にトリップしたわけ。つまり、平行世界同士がつながった理由が分からない限り君は元の世界には帰れないって事」

とりあえずトリップした事に関しては納得がいった。でも記憶喪失については？

「記憶喪失に関しては……うまく説明がつけられそうにないんだ。トリップした事と何か関連があるのかもしれないけど。トリップの原因が分からない限りどうしようもないかな」

簡単な説明。それだけ単純な事なのだが、事実は重い。

「……じゃあ、どうしたらいいの？」

私に元の世界にいた時の記憶はない。だから正直元の世界に帰りたいわけでもない。

しかし、さっきの説明の通り、私はこの世界にいるべきでない人間だ。

帰りたんじゃない。帰らなくてはいけないんだ。

「方法はあるかもしれない。トリップの謎を解く方法」

少年がつぶやいた。

「ど……どんな方法？」

「君のいた世界に魔法ってある？」

唐突な質問に私は戸惑う。

「多分……なかつたと思う」

「この世界には魔法って概念があつてね。俺、一応魔法使いなわけ」

「やっぱり頭がおかしかつたのね。かわいそうに」

私が少年に憐れみの視線を送ると彼は慌てたように言った。

「頭はいたって正常だよ！この世界と君の世界とは色々違うの！学校とかでも魔法が必修科目になつてたりするんだ。で、俺のように

魔法を使う事に長けた人間は魔法を職業とする」

あ、なるほど。これで彼が私を「待つていた」事も説明がついた。

魔法が使えるなら予知くらいやすい。

「しかし、魔法を職業とする人間でも使えない……使つてはならない魔法が存在する。その魔法は禁止魔法と呼ばれ、魔法使いにとつ

てこの魔法は口にするのもはばかられる程タブー視されたものなん

だ」

「それとトリップしたことに何の関係が……？」

「この屋敷のどこかに禁止魔法について書かれた本があつたと思う

んだ。禁止魔法の使い方とかはさすがに書いてなかつた。でも確か

本当かどうか俺の記憶も怪しいんだけど、『もうひとつの世

界をつなぐ魔法』についての記述があつた。だから、その本が見つ

ければ……もしかしたら手掛かりくらいは掴めるかもしれない」

「……本当に？」

「こんなに上手くいくとは思つてなかつた。本が見つかれば……帰

れるかもしれない。

「……」

「……」

「うん。でもその本どこにあるか分かんないし、題名忘れたから買  
いなおす事もできないから。……何が言いたいか、分かるよね？」  
分かったよ。私そこまでバカじゃないし。

「明日から頑張っつてこの屋敷片づけてやるわよ！」

「分かつてるねえ！あ、そうそう。自己紹介忘れてたね。俺はナイ  
ト＝ルーフエン。よろしくね」

「私は……」

言葉に詰まってしまった。名前も年も分からない。どう自分を紹  
介したらいいのやら。

「そういえば君は記憶喪失だったね……『魔女』じゃダメかな？」

「いいわよ。でもそう呼んだら最後、あなたの命はないわよ」

「うーむ……それは困るねえ。じゃあ『ナナシ』。ほら、名前無い  
わけだし」

魔女よりかはよっぽどマシだがこいつのネーミングセンスはひど  
い。

「何も言わないのは肯定つて事だから『ナナシ』に決定　おめで  
とうございまーす！」

ナイトが笑いながらパチパチと拍手をする。

めでたくない。全くとめてめでたくないから！

「あでもナナシって言いにくいな。呼ぶときはナナでいいか」

彼の言動や行動は少々どころでなくムカつく。

ムカつくけど、何だかんだ私を助けて平行世界とかトリップの事  
とかを教えてくれた。

記憶はない。なぜトリップしたのかも分からない。知り合いも約  
一名。

それでも、何とか生きて行けるって思えたんだ。

To Be Continued?

## Scene 4 .

「さあ、どこからでもかかってらっしゃい！」

私は今、ナイトの書齋に立ち向かおうとしている。

ここまでの道のりは長かった。

やっぱり本を探すならまず書齋からだろう。そう思って書齋へ向かおうとした。

しかし、廊下に溢れるゴミ達が私の行く手を阻んだ。

それに書齋は屋敷の一番奥だった。

片づけつつ進むのにどの位かかっただろうか。屋敷にはあまり時計が置かれていないので分からないけど。

そしてやつと書齋の扉までやってきたのだ。

早速扉を開けようとした私の頭に、ふと悪い予感がよぎった。

「廊下の有様からしても、中が片付いているとは到底思えない。：

…崩れてきたりして」

もし崩れてきたら私は確実に下敷きだ。でも開けないと書齋には入れないわけで。

少し考える。三秒後、私は迷う事なく扉を勢いよく開けて素早くその後ろに隠れた。

予想通りだった。ものすごい音に伴い、大量の本が崩れてきた。

扉の陰から、私は雪崩の一部始終を見守っていた。

その時。金色に光る何か雪崩れと共に落ちてきて、私の足元に転がった。

それを拾い上げる。金色の懐中時計だった。魔法陣を模った装飾。いかにも魔法使いが持っていそう。

あとでナイトに渡しておこう。私はそれをエプロンのポケットに入れた。

雪崩れた本を、題名を確認してから廊下の隅に積み上げる。

『美味しいケーキの焼き方』や『星占い指南書』など、目的の本とはかけ離れたものばかりだ。

積み上げていくうちに廊下に崩れた本は片づけ終わった。やっと中に入れる。

それにしても、どう散らかしたらこんな雪崩が起こせるのだろうか……？

書齋に入り、中を見渡す。高い天井の近くまである大きな本棚。今は空っぽだが、その最上段まで本が入っていたのだろう。

そして高い位置の本を取るためだろう。脚立がいくつもあった。そして床を埋め尽くす本やその他もろもろ。よく見ると服まで埋まっている。これ、ナイトの上着じゃない？

こんな所に脱ぎ捨てたらダメじゃないのと思いつつ、上着を引っ張る。どこかで引っかかっているようだ。

さらに引っ張ると、やっと出てきた。……ただし、本体付きで。

「あれ……何か明るい……ってナナシちゃん!？」

「あらびっくり。上着を掘り出そうとしたのに魔法使いまでついてきたわ。どういうキャンペーン?」

「キャンペーンでも何でもないよー。昨日の夜、本を読んだまま寝てたら突然雪崩れて埋まっちゃったんだよ」

ナイトが周りの本をどかし、乱雑に積み上げる。

「ありがとね、掘り出してくれて。あのまま本に埋もれて死ぬのはさすがに嫌だし……でもさ」

ナイトが私のポケットからさっきの懐中時計を引っ張り出し、文字盤を私に見せて苦笑いした。

「いくら何でもこんなに早く起こさなくてもいいでしょ。時間の感覚大丈夫?」

時計の短針は五を指していた。窓の外を見ると、太陽は東の空の低い位置にいた。

「はっ……早起きは健康な生活の基本でしょっ!」

「この世界と君の世界では時差があるようだね。てなわけでこれあ

げるよ」

ナイトは懐中時計を投げてよこした。

「いいの？こんな高そうなモノ」

「大丈夫だよ、全然お高くないから。その時計は確か三年前に行商人から買ったんだけど、多分千レイス位だったと思う。」

……あつ、レイスっていうのはこの国の通貨で、五百レイスでパンが一袋買える位」

安すぎるだろ。売れ残りだったのだろうか……。

「じゃあ、ありがたく貰つとくわ。起こしてごめんね。でもちゃんと部屋で寝なさいよ。朝ごはんできたら起こすから」

了解、とナイトは書斎からふらふらと出て行った。私は片づけを再開した。

結局、『禁止魔法』の本は書斎には見当たらなかった。恐らくナイトが何処かに埋もれさせたのだろう。

それに、時計を見るともう午前十時。そろそろ朝食を用意しないと。

本探しは第二ラウンドに持ち越しか……はあ

To Be Continued?

頑張つて探ししたけど、結局本が見つからなかったその朝。

私は一階へ降り、キッチンへ向かった。朝食を作らなきゃ。作つてからナイトを起せばいいだろう。

しかし、食料庫を覗いた私はナイトの部屋に怒鳴り込んだ。

「キッチンがやたらにキレイだなと思つたら食料何にも無いじゃない！食材どころか砂糖！砂糖もないわよ！」

ナイトは驚いてベッドから飛び上がった。吹っ飛んだモノクルを探しつつ言う。

「あー……最近買い物に出てなかったからね。食べ尽くしちゃったのかな？」

「いつから食べてないの！ゴミ箱もコーヒーのカスくらいで、食べ物を食べた形跡がなかったわ」

「あー……動かないから腹も減らなくてね。三食コーヒーの時もあったねえ」

「コーヒーは『食』に入らんだろう」

私はため息をつく。このままでは朝食は作れない。そしてこいつの食生活も何とかしなければならぬ。

「……買い物、行って来て」

私がそう言うとナイトは嫌そうな顔をした。

「やだ。そういうのはナナちゃんの仕事でしょー」

「行って来るにも食料店がどこにあるのか分からないし、下手に一人で村を歩くと魔女狩りされかねないわ」

それでもいいの？と聞くとナイトは諦めたような表情で言った。

「……分かった、連れてくよ。あんな村にも信頼できる店が一軒だけあるんだ」

そう来なくっちゃ。それに知り合い約一名じゃ少々さみしい。誰かと仲良くなるチャンスかもしれない！

「ここからまっすぐ行くと『エルメール』って店がある。色んな物売ってるから、欲しい物はたいていそこで揃うよ」

森の入り口。でも、昨日私を通った道ではなかった。

「この村、広いのねー。昨日村中歩いたと思ったのに知らない場所に出るなんて」

「村という言葉が相応しくないレベルでただっ広いんだよ。森とかあるからかな」

喋りつつしばらく歩くと、赤い屋根のかわいらしいお店が見えてきた。

「あそこだよ、『エルメール』は」

「……大丈夫かな。私『魔女』とか言われてるんだよ？叩き出されたりしない……？」

昨日の事があったから。表面上強がってても、やっぱり不安だった。

「大丈夫だよー。俺、この店の店員と知り合いだからさ」

なんだ。だったら大丈夫だ。……ナイトがその人の事を勝手に知り合いだと思っ込んでない限り。

店に入ると、かわいらしい店員さんがいた。年はナイトと同じくらいだろう。

知り合いの店員さんって、あの人の事だったりして。

「いらつしやいませー……ってナイト！？そちらの方はまさか……」  
「噂の『魔女』だよ」

店員さんは驚いたような顔をしていたが、やがて表情を緩めた。

「……全然魔女っぽくないじゃない。村の人たちは必要以上にビビり過ぎなのよ」

そして私の方を見て聞いた。

「あなた、名前は？」



私が返事に困っているとナイトが代わりに答えた。

「記憶喪失なんだ。だから『ナナ』とでも呼んであげて」

「じゃあナナさん、この店ではあなたを魔女扱いなんてしないから。だからいつでもお買い物にいらっしやい」

店員さんは微笑んでいた。

嬉しかった。こんな村にだっていい人はいたんだ。

「ありがとう、ソフィア。この店に連れてきて正解だったよ」

店員さん　ソフィアさんは笑いながら答える。

「私、人を噂で判断するような事はしないよ。百聞は一見にしかず。会ってみなきゃ分からないでしょ」

「いい心がけだ！よし、今日は色々買ってくよ。大奮発だ！」

「ありがとうございます！」

こうして私たちは上機嫌で生活費の限り食料やその他もろもろを買いまくった。あと塩も。

「生活費には一光熱費（ランプの油代）や水道代、被服費も含まれるのよ？」

「はい……」

「食料とか消耗品ばかりあったって、暮らしていけないのよ？」

「存じております……」

「どーすんのよこれから先！今月どころか来月の生活費まで全部使っちゃって！赤字よ赤字！」

「ナナちゃんだって浮かれて買い物してたじゃないか！」

「うぐ……でつ、でも！十袋も砂糖はいらないでしょ！」

「備えあれば憂いなしっていうじゃん！」

「備えすぎで憂いるんじゃないが！」

「はいはいはい！覆水盆に返らず！使っちゃったもんは戻ってこない！」

ソフィアさんが止めに入る。

「ソフィア……とりあえず砂糖九袋返品したいんだけど」

「『エルメール』では不良品以外の返品・交換は受け付けておりま

せーん！」

ナイトの要求は退けられてしまった。まあ自業自得って奴なんだけど。

色々と協議した結果、私が四月まで『エルメール』でバイトして生活費を何とかする事になった。

いやはや、家政婦も楽じゃない。アホなご主人様のせいだ。

(そういえば、何でバイト四月までなんだろう……?)

To Be Continued?

Scene 6 .

「こつ……これが学校　！？」

私は今、ナイトに連れられて『アイリス魔法学園』の前にいる。学校というよりお城のようなその建物に私はびっくりしていた。事のおこりはエイプリルフル。私の期間限定バイト最終日だった。

何でも屋『エルメール』のカウンター前。

「ナナさん、お疲れ様。今日でバイトはおしまいよ」

ソフィアさんはそう言っただけで給料の入った封筒を手渡した。

「もう四月になったんですね」

私がこの世界に飛ばされてはや二週間。

『魔女』扱いはいまだにされてるけど、何人かお客様と仲良くなれた。

ナイトの家政婦しつつバイトに勤しんでたら時間は飛ぶように過ぎて行った。

封筒の中を見る。少なくとも今月分の生活費は赤字を免れるだろう。

「どう？今月分位何とかできそう？」

どこから湧いたのか、ナイトがひよこつと顔を出す。

「そうね、あなたの買った砂糖九袋分は何とかできるわよ」

そう言っただけでナイトの方をジッと見ると、彼は目をそらしてごまかそうとする。

「ま……まあ、何にせよお疲れ様。これで少し肩の荷も下りるね」  
ナイトが肩にかけたカバンをゴソゴソと探り、分厚い書類を取り出す。

「という訳でこれからもナナちゃんに充実した生活を送ってもらう

ために、魔法使いから素敵なプレゼントだよ」

渡された書類を見ると、『アイリス魔法学園編入のご案内』とあった。

「これ、うちの学園の案内じゃない。ナイト、まさかナナさんを学校に入れるつもりなの？」

ソフィアさんが驚いて言う。もともと、一番驚いているのは他でもない私なのだが。

「そうだよ。ナナちゃんもまだまだ若いし、家政婦とバイトに明け暮れさせるのはかわいそうだからね」

「えっ……でもちよつと待ってよ。私、身元不明の記憶喪失なヨソモノ魔女だよ？学校入れるの？」

身元不明な人間ウエルカムな学校は普通ないだろう。入れないのが当たり前だ。

「それがねえ、学園長先生と直談判したら案外簡単にOK出たんだ。だから今月からナナちゃんは立派な学生だよ！」

「じっ……直談判!？」

ソフィアさんは真っ青になっていた。

「あんだ、あの学園長先生と直談判したの!？命知らずも大概にしなさいよ！」

「あのー、そんなに学園長先生って怖いんですか？」

私が聞くと、ソフィアさんは私の両肩を掴んで揺する。

「怖いなんてものじゃない!ちよつとでも気に障る事すれば即学生卒、運が悪きや退学よ!」

「それは先生として幾分間違っているように思えますが」

ガクガク揺すられながら私は言った。そんな怖い先生のいる学校なんてイヤだ。

「ソフィアの言ってるのは単なる噂だよ。だってソフィアは優等生だから学園長先生に怒られた事ないでしょ?だから知らないんだよ。

学園長先生はそんなに怖くないよ!。『越後屋印のお菓子』チラつかせて少々ゴリ押せば要求が通るんだから」

「……ワイロ渡したんだ」

そう言つとナイトが慌てて弁解する。

「いやいや、『越後屋印のお菓子』ってだけだから！底にお金とか入ってないから！」

「生活費が赤字ギリギリなのにワイロ用の金はあるんだ」

私はナイトをにらんだ。

「店やつてる身としてそういうのは……軽蔑するわ」

ソフィアさんもそれに乗っかり、ナイトはしょぼくしてしまった。  
「まあ何にせよこれからナナちゃんはスクールライフをエンジョイできるんだから、感謝してよ？」

「はいはい、アリガトウゴザイマース」

「全然気持ちが悪もってないよ!？」

まさかの裏口入学だったけど、学校に行くって事は外の世界に触れる機会が増えるって事だから。

魔女って言われるかもしれないけど、きっと友達もできるはず。  
そのチャンスがもたらえたって事。

ホントは嬉しかったんだよ？魔法使いのプレゼント。

「あの時はホントひどかったよ。『越後屋印のお菓子』ってだけで別にワイロじゃないのにさー」

そう言つてナイトはカバンから『越後屋印のお菓子』を取り出し、包装紙を破いて渡す。

「ああもう、包装紙は破らず取つとけつて言つたじゃない……つてホントにただのお菓子なの!？」

「そうそう。紛らわしい名前だけどホントにただのお饅頭。学園長先生がこれ大好物でさ」

なんだ。悪い事しちゃつたな。ていうかお饅頭つてこの世界にもあるんだ……。

「でもそれ学園長先生にあげたんでしょ？それってある意味、ワイロよね」

お饅頭をほおばりながら私は言う。ナイトは笑いながらこう言った。

「お金じゃないからノーカン、だよ」

To Be Continued?

## Scene 7 .

私は廊下を歩いていた。

だがしかし視線をものすごく感じる。時々陰口も。

まあ、こいつらから見たら私は『魔女』なんだから仕方ない事だと思っっているけど。

投げつけられた石を投げ返していると突然、私の前に人が飛び出してきた。

私は石を投げ返す真っ最中。当然前なんか見てない。そんな訳で正面衝突してしまった。

「大丈夫ですか!？」

私は慌ててぶつかった人の所に駆け寄った。

するとその人はむくりと起き上がり、拳銃を私の額に当てた。

「誰かー、ここに銃刀法違反がいます。警察を呼んでください!」

私がそう叫ぶと銃刀法違反はバカにしたような顔で言い放つ。

「残念だったな、魔女!この国にそんな法律はない!今すぐに狩ってやる!」

私は言われた通り両手を挙げて、それから反論する。

「でも殺人はさすがに罪になるでしょ?私を殺して狩られてきなさいよ警察に」

その人は悔しそうな顔をして拳銃を私の額に更に押し付ける。

「魔女のクセにこの俺にそんな口を聞いていいのか?しかと聞け!

俺の名はシグマ・アーサーズ!『魔女狩り同好会』会長だ!」

そう言っただけはビシッ!とポーズを決めた。

「だからといって別にあんたにどんな口を聞こうが私の勝手のような気がするんだけど気のせいかしら」

「お前は『魔女』なんだから『勇者』の俺に生意気な事を言うな!

黙って狩られればいいのだ！」

「なるほど。つまり『魔女』の私は『勇者』のあなたに狩られなきゃいけない訳ね。あんたみたいなアホに狩られるの嫌だ」

自称勇者は硬直した。私は続ける。

「だってそうじゃない？自分の事勇者って言う時点で残念な人確定だし、武器振り回す奴がマトモだと思えないし。」

それとも、あんたの脳はそんな一般常識も分からない位小さくて可愛い脳なんですかー？」

自称勇者の方をちらりと見ると彼はブチ切れ五秒前な顔をしていた。

「ま……魔女のクセに……魔女のクセに……！」

「だから何よ。言論の自由はこの国で保障されてないのかしら？」

「お前ヨソモノだろうが！ヨソモノに憲法なんか関係ない！」

「『郷に入れば郷に従え』って言うじゃない。分かんないの？やっぱりあんたの脳は小豆粒サイズなのね」

あ、ブチ切れ一秒前になった。青筋浮いてるしそろそろまずいかな？

「い……今すぐ狩ってやる！俺の手で狩ってやるんだあああああ！！」

自称勇者は拳銃の安全装置を外してトリガーに指をかけた。

撃たれる！と思ったその瞬間、ベキツという音とともに自称勇者が足元に転がった。

五、六人の生徒たちが彼を縛り上げる。

「……校則第十八条より『危険物の持ち込みは原則禁止』。……風紀委員によって違反者の『回収』は完了いたしました」

眼鏡をかけた三つ編みの少女が私の前に来た。彼女がこの集団のボスらしい。

「危ない所をありがとございます。ところであなたは……？」

「……フィオナ＝リンデンと申します。……風紀委員をしております」



フィオナさんは淡々と自己紹介してくれた。表情は全く変わらな  
い。

「……先ほどの違反者　アースーズは校則第十八条の違反常習者  
です。……主に拳銃や剣、爆弾を持ち込んでいます。」

「……今回は学生牢に授業終了まで『回収』　収監しておきます  
のでご安心ください」

そんな危ない人に私、目つけられたのか……。あんな口叩いて大  
丈夫だったかなと今更ながらドキドキしている。

「……それでは、次の仕事がありますので。……何かあればまた『  
回収』に参ります」

フィオナさんはぺこりとお辞儀をし、集団を引き連れて病院の総  
回診のごとく去って行った。

「につつき魔女！今回は引き下がってやるが、次会う時が年貢の納  
め時だ！首を洗って待つてるがいい！」

自称勇者シグマはずりずりと引きずられながら捨て台詞を吐いた。  
「……言い回しが古いわよ。江戸時代か」

遠く見えなくなっていくシグマに冷ややかな視線を送りながらつ  
ぶやいた。

ああ、どこいったスクールライフ……。

To Be Continued?

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4564z/>

---

parallel magic

2012年1月14日02時51分発行